様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０６１１

研究課題名（和文）自己愛的青年の社会適応を促す要因の解明と心理教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Research on promotional factor of social adjustment of narcissistic adolescents.

研究代表者
中山　留美子（Nakayama, Rumiko）

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０５５５５０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：自己愛的な青年は社会的な不適応に陥りやすいことが指摘されてきた。本研究では、「自己愛的な青年は、協同作業に対して好ましい認識を持たないために他者との協調が保たれにくくい」という不適応発生の原因に着目し、要因間の関係と、介入的な取り組みの影響を検討した。
個人的達成よる自分らしさの確立を目指す誇大な自己愛的青年と異なり、そういった志向性をもたないにも関わらず、協同に価値を置かない過敏な自己愛的青年は、不安等の否定的感情によって、協同を避けているものと考えられた。
スキル訓練を行ったり、グループを評価する観点に工夫を加えたりすることで、過敏な自己愛的青年の不適応的な傾向が改善することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study project examined promotional factor of social adjustment in narcissistic adolescents. Correlation analysis clarified that narcissists tend to underestimate accomplishment of collaboration, and put value on individual work. However, analysis of their "personality orientation" ,indicating discrepancy between two types of narcissist ("grandiose narcissist" and "hypersensitive narcissist"), hypersensitive narcissists feel uneasy in social context because of their fear of negative evaluation. Despite both narcissistic type have been pointed out about their social maladaptiveness, hypersensitive type was thought to be more unhealthy from the view of psychological wellness. Studies on interventional treatment in class and experimental settings indicated that cognition and behavior of hypersensitive narcissists could be changed by some kind of skill training (eg. assertion training) or instruction about evaluation.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：自己愛　大学生　社会的適応　介入

１．研究開始当初の背景

（１）青年期の自己愛と社会的不適応の関連

これまで、自己愛の高さが、他者に対する攻撃性や搾取的な行動など、望ましくない社会的行動を予測することや、そのような特徴をもって他者と関わる結果として、自己愛の高い人が社会的に不適応に陥りやすいことが指摘されてきた（ eg. Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004）。自己愛はパーソナリティ特性の一つであり、その高さには個人差がある。同時に、青年期には他の発達段階に比して自己愛傾向が高まることが明らかとなっており（中山・中谷 , 2006）、自己愛傾向は特に青年期発達を捉える重要な変数として研究されてきている。パーソナリティ発達の過程との関係で、親密な人間関係の形成を失敗に至らしめる要因である自己愛をもちやすいのが青年期であるといえる。

（２）青年期の適応を支えるための取り組みの必要性

自己愛に関する先行研究においては、青年期における自己愛がどのような結果をもたらすのか、あるいはなぜその結果がもたらされるのかということについては多く研究されてきたが、自己愛性を低下させたり、自己愛的であっても適応的な対人行動がとれるような働きかけといった、介入的な視点での検討ほとんどなされてこなかった。しかし、青年にとって、学校や大学などの環境のなかで親密な関係性を形成することは非常に重要な課題であり、自己愛傾向がもたらす対人的な悪影響を抑制するという視点は、青年の適応支援において、重要な視点となると考えられた。

２．研究の目的

（１）自己愛的青年が課題や対人関係に対してもつ認識・態度の検討

自己愛者の自己システムは、「自己評価を維持・高揚する」という目的で機能していると考えられる（Baumeister, Smarr, & Boden, 1996）。自己愛的態度や行動は、自らの評価を高める（低めない）ことを最優先してしまうために生じるものであることが予想される。例えば、他者に謝罪すべき時に自己弁護に走ったり、成功した他者に悪態をついたりといったことは、人間関係を保つことよりも、自己評価を低めないことを優先することにより生じる行動である。また、協力して（他者に援助しながら）作業をするよりも、自分一人で取り組んだ方が高い成果が得られると考えて協力をしない、ということも、同様の意識から導かれる結果だと考えられる。

本研究では、自己愛と協同作業課題に対する態度、対人態度との関連を検討することを目的とした。

（２）教育的な取り組みが自己愛的な青年の行動に及ぼす影響の検討

自己愛が社会的な不適応に結びつくのは、自己愛そのものやそれによって導かれる態度（自己評価を維持・高揚しようとする態度）による結果ではなく、その態度によって（社会的には）不適切な目標設定をし、それに基づいた行動をとる結果であると考えられる。そこで、本研究では、行動（ソーシャルスキル）への直接的（教育的）な働きかけと、目標設定への認知的な働きかけが、青年の日常的な行動に及ぼす影響について検討することを目的とした。具体的には、①適度な主張性（アサーティブネス）を高める教育プログラムに参加した学生における変化と、②目標構造を変化させて実施する協同作業課題での取り組み方を検討することによって、自己愛的な青年の行動を変容させうる取り組みについて検討を行うこととした。

３．研究の方法

自己愛的青年が協同作業に対してもつ認識の検討（目的（１））と、教育的な取り組みが自己愛的青年の行動に及ぼす影響の検討（目的（２））を行った。なお、自己愛には誇大、過敏の 2 種類があることが指摘されており、自己愛者が自己評価を維持・高揚しようとする意識には、自らに強い自信を持つことによってそれを達成しようとする方向（誇大な自己愛；誇大性）と、他者からの悪評がないことを確認することによって達成しようとする方向（過敏な自己愛；過敏性）があると考えられる。本課題では、この 2 種類がそれぞれどのような特徴を持ち、働きかけに対する反応を示すのかを検討した。

<u>調査対象者</u>

先行研究において、関係形成から数ヶ月～半年ほどの間に自己愛者が不適応傾向を増すことが報告されていることや、既にできあがった関係性の中では、行動パターンや他者からの反応、環境のとらえ方等が固定されていると考えられることから、対人関係が新たに形成される時期である、大学入学直後の学生（大学 1 年生）に対して、4 月から 7 月にかけての時期に調査を行った。

<u>調査内容</u>

（１）は、大学生を対象とする質問紙調査により検討した。用いた尺度は協同作業認識尺度（長濱ら, 2009）と個人志向性・社会志向性尺度（伊藤, 1993）であった。授業を通して調査への協力依頼と質問紙の配布を行い、持ち帰り調査の形で調査実施をした。記入済みの質問紙の回収は、後日の授業内でアナウンスしたうえで、授業後に行った。

（２）については、調査と実験により検討を行った。調査は、初年次教育の一環として行われた教育プログラム（授業）と連動して実施し、協同的な行動と適切な主張（アサーション）を促す取り組みの中での主張性の変

化と自己愛と関連を検討した。実験では、協同作業場面での「成果」についての教示の仕方が、作業への取り組み方にどのような影響を与えるのかを検討した。調査協力の依頼はともに授業を通して行われ、主張性の変化についての調査は持ち帰り調査（3 時点）、実験については、研究参加を希望する日程について書面で提出してもらい、後日日程を連絡して実施した。なお、実際に活動しているグループで生起している現象を明らかにするため、実験では、自己愛的な学生の対人適応が入学 2 か月後に低下するという知見（中山, 2010）から、授業での活動グループ（入学時に結成され、週 1 回の協同的活動を行っているグループ）を研究対象として、研究協力も、グループごとに求めた。

## ４．研究成果

### （１）自己愛的青年の対人態度、協同作業への認識

自己愛および性別を独立変数、協同作業認識尺度（長濱ら, 2009）を従属変数とする重回帰分析を行った（Table 1）。

Table 1　協同作業認識に対する重回帰分析の結果

| | 協同効用 | 個人志向 | 互恵懸念 |
|---|---|---|---|
| 性別 | .16 | -.08 | -.17 * |
| 誇大性 | -.14 | .17 * | .19 * |
| 評価過敏性 | -.21 * | .41 *** | .33 *** |
| $R^2$ | .11 ** | .24 *** | .22 *** |

*** $p$ <.001, ** $p$ <.01, * $p$ <.05

分析の結果、自己愛の傾向の高い人は、自己愛のタイプ（誇大性あるいは過敏性）に関わらず、集団で取り組むより自分一人で取り組んだほうがより高い成果（自己評価高揚の機会）が得られると考えていることが示唆された。このような認識が好ましくない対人態度や言動を生み、対人適応を悪化させることが推測された。

また、対人態度として、個人志向性、社会志向性（伊藤, 1993）を取り上げ、相関係数を算出したところ（Table 2）、誇大性の高い人が、より個人志向的であることが示された。

Table 2 自己愛と対人的態度の関連

| | 個人志向性 | 社会志向性 |
|---|---|---|
| 誇大性 | .37*** | .17* |
| 過敏性 | -.04 | -.06 |

*$p$ <.05, **$p$ <.01, ***$p$ <.001

協同作業認識としての「個人志向性」が、一人で作業をした方が成果が上がる、というような意識を扱っている一方、対人態度としての「個人志向性」は、自分の個性を活かそうと努めている等、個性を発揮しようとする志向性を扱う概念である。過敏性に関しては、「個人志向性」に関して逆の結果が得られたが、これは、自分の個性を発揮することに自信が無い結果として、他者との協同作業を好まない、という意識の表れと考えられた。

### （２）教育的な取り組みが自己愛的青年の行動に及ぼす影響

#### ①　教育プログラムへの参加が主張性の変化に及ぼす影響の検討

授業開始から終了までの期間（3 時点）における自己愛と主張性の関係について、縦断的な検討を行った結果、過敏な自己愛の高さによって主張性の変化の仕方に違いがあることが明らかになった。

時期ごとの主張性得点について詳細な分析をしたところ、過敏な自己愛は、関係の初期（1 回目調査時）においては主張性の低さを示すものの、相互作用の機会を何度ももち、関係性が深まっていくにつれ、その傾向がみられなくなることが明らかになった（Figure 1；エラーバーは標準偏差）。

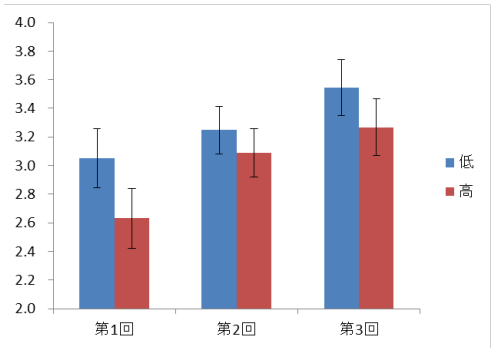


Figure 1　過敏性のレベルごとの主張性の変化

過敏な自己愛者は抑制的であり、対人関係の中で不適応感をもちやすいことが指摘されているが、このデータから、人間関係や主張性に関する指導を受けながら人間関係を進行させていく中で、積極性を高められることが示唆されたといえる。

ただし、自己愛者は「関係初期には良い印象を受けるのに、関係が深まるにつれ嫌われる傾向がある」という実証研究の知見や、関係性が深まるにつれ攻撃性などの否定的な側面を顕在化させる傾向があるという、臨床的な研究による指摘も存在しており（Cooper & Ronningstam, 1992 など）、単純に主張性を高めるのではなく、他者に配慮したうえでの主張性（アサーティブネス）を高めるという働きかけが重要であると考えられる。調査対象とした授業では、そういった意味での主張性を教える内容であったが、今後、「主張性」の質的な差異を弁別して測定し、どのような主張性がどのような結果（不適応感等）を導くのかを明らかにしたうえで、具体的な働きかけを考えていく必要があるという課題も得た。

#### ②目標構造を変化させることによる協同作業課題での取り組みへの影響の検討

自己愛者の目標は、自分自身の評価を高め

る（低めない）ことであり、グループでの作業とその成果は、自分とは距離があり、自己評価を高める（危険にさらす）材料として価値の低いものである。実際、協同作業認識についての検討結果からは、自己愛者が協同作業を好ましく認識しておらず、自分一人で取り組んだ方が高い成果が上がると認識する傾向があることが明らかとあった。

しかし、このような認識がなされるのは、集団作業の評価がどのような条件で行われるのかが曖昧な場合であると考えられる。個々の成員が確実に評価されるよう工夫をしたり、貢献した個々人が明らかになるような形で集団の業績の評価がなされる場合には、その評価は自己評価の材料となり、集団作業であっても、自己高揚の機会となりうると考えられる。そこで、「メンバー名とともに集団の成績を貼り出す」（評価公開条件）、「成績とグループの順位を各グループにのみフィードバックする」（個人的評価条件）、「評価のフィードバックは行わない」（評価なし条件）という 3 種類の評価条件を設定したうえで集団作業を実施し、個々の取り組み量への影響について分析を行った。

その結果、誇大性は評価条件に関わらずパフォーマンスを予測し、個人的評価条件において、過敏性が高いほどパフォーマンスが高くなることが明らかになった。また、評価公開条件において、過敏性が高いほどパフォーマンスが低くなる傾向にあることが示された（Table 3）。

Table3　自己愛と評価条件による階層的重回帰分析

| 投入変数 | | 標準偏回帰係数（β） Step1 | Step2 | Step3 |
|---|---|---|---|---|
| Step1 | 自尊 | -.02 | -.12 | -.11 |
| Step2 | A 自己愛 | | .23 * | .26 * |
| | 自己愛（評価過敏性） | | .09 | .13 |
| | B 評価条件(dummy1:no-private) | | .15 | .15 |
| | 評価条件(dummy2:no-public) | | .15 | .15 |
| Step3 | A×B 交互作用（誇大*dummy1） | | | -.07 |
| | A×B 交互作用（誇大*dummy2） | | | -.10 |
| | A×B 交互作用（過敏*dummy1） | | | -.23 † |
| | A×B 交互作用（過敏*dummy2） | | | .17 |
| | $R^2$ | .00 | .07 | .10 |
| 調整済み$R^2$ | | -.01 | .04 | .06 |

*$p$<.05, †$p$<.10

今回の実験で設定した集団作業状況は、個々のメンバーに 20 枚ずつのカードを渡し、20 分間で、提示された物品の本来の用法以外の用法をできるだけ多く挙げる、というものであり、それが将来的な仕事での業績を予測する、知的能力に関わる課題であると教示していた。個々にカード束が配布されたため、一人ずつのパフォーマンス（成績、遂行量）がどれほどかをグループメンバー同士で認識できる状況となっており、グループメンバーに対して能力や貢献度を誇示できる機会となるような構造となっていた。誇大な自己愛がパフォーマンスと関連したのは、このような課題の構造を反映していた可能性がある。

過敏性については、その高さが評価の条件による取り組み方の違いと関係していることが示された。この結果について更なる分析を行ったところ、過敏性の低い人では、評価が公開される条件で最もパフォーマンスがよく、過敏性の高い人では、評価が所属グループにのみ返される条件で最も高いパフォーマンスであった。過敏性は、公に個人が低く評価されることへの恐れと関係すると考えられ、結果の公開性が低い場合には、グループメンバーに貢献するために作業を遂行できるが、公開される条件においては、自己評価が公にさらされるという不安感情等が影響して、パフォーマンスが低下したことが予想される。

③今後に向けた課題

本研究では、自己愛的な青年において他者との協同を阻害する心理的メカニズムが働いていることを実証し、また、それに対する介入の可能性を示唆する結果を得た。今後、本研究課題について明らかにした結果について論文化し、結果を広く共有していく。

また、本研究では誇大な自己愛的青年に関する介入に関しては示唆が得られなかった。今後、本研究で考慮しなかった要因についても扱い、さらにこの課題について検討を重ねていきたい。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）


１．清水健司・中山留美子・小塩真司（2013）“２種類の自己愛”モデルにおける相互関係の検討　信州大学人文学部　人文科学論集人間情報学科編，47，53-67.　査読なし


〔学会発表〕（計　8　件）


１．中山留美子（2013）自己愛者はいつも非協力的なのか　日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会

２．中山留美子（2013）2 種類の自己愛と主張性の関連－相関および教育プログラムの効果についての検討 －日本教育心理学会第 55 回総会

３．中山留美子（2012）グループ活動における対人関係への動機づけ－大学適応との関連の縦断的検討－ 日本教育心理学会第 54 回総会

４．中山留美子（2012）グループ活動における対人関係への動機づけ －授業期間中における動機づけスタイルの変化の検討－　日本パーソナリティ心理学会第

21 回大会
５．中山留美子・長濱文与（2011）協同的活動がグループ活動への捉え方に及ぼす影響　日本協同教育学会第 8 回大会
６．中山留美子（2011）自己愛傾向と協同作業に対する認識との関連　日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会
７．長濱文与・中山留美子・小川雅広（2011）協同教育にもとづく授業実践　初年次教育学会第 4 回大会
８．中山留美子（2011）グループ活動への取り組みの変化と 2 種類の自己愛　　日本心理学会第 75 回大会

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中山　留美子（NAKAYAMA, Rumiko）
奈良教育大学教育学部・准教授
研究者番号：60555506

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし